自民清風会　会長：蜂須賀　喜久好　印

調査研究(研修)視察報告書

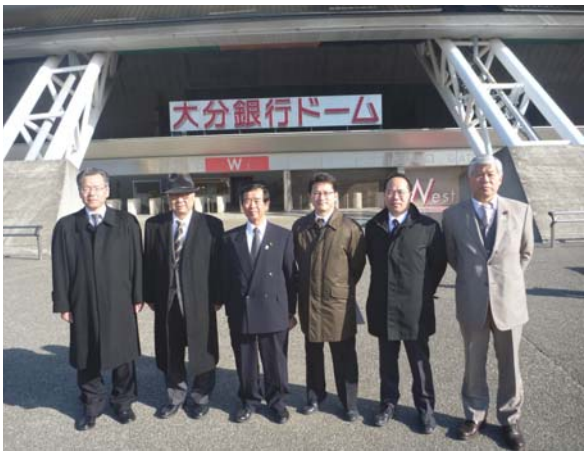
報告者：三浦　康宏

視　察　日	平成２７年１月１３日（火）
視 察 内 容	だいきんグラウンドについて
視　察　者	小野政明、野村康治、内田実、川上守、鈴木静男、三浦康宏

＜大分市の概要＞

大分市は大分平野を中心とした商工業都市。戦国大名、大友氏の拠点。鉄鋼、化学、石油、など基礎素材産業や電子部品等の加工組立産業が集積する工業都市。05年１月に佐賀関町、野津原町と合併した。県都にふさわしい都市づくりを目指し、大分駅付近連続立体交差、大分県南土地区画整理、関連街路事業などを一体的に推進。中心市街地の新たな拠点として、市民ホール、図書館などの複合的な機能を備えたホルトホール大分が 13 年 7 月にオープン。更に 15 年春には「JR 大分駅ビル」「大分駅北口駅前広場」「大分県立美術館」がオープン予定。

面積：501.28ｋ㎡　人口：474,094 人



＜大分市　だいぎんグラウンドの概要＞

だいぎんグラウンドは大分県が㈱大宣に指定管理を依頼している大分スポーツ公園内にある第３種陸上競技場で、2006 年２月１日にこのグラウンドが認定されたことにより、同公園内にある大分銀行ドームが第１種陸上競技場に格上げされた。園内には他にも 2500 人収容のだいきんスタジアム（野球場）、天然芝２面のだいきんサッカー・ラグビー場、砂入人口芝コート 20 面のだいきんテニスコート、軟式野球２面他の多目的運動広場、だいきんフィールド（投てき場）、イベント会場として利用可能な大芝生広場、グラウンドゴルフのできる芝生の多目的広場に温泉やレストランも備えた宿泊研修センター「希感舎」（22 室 104 人宿泊可能）がある。

＜大分市　だいぎんグラウンドの内容＞

平成 22 年３月より大分銀行が年間 4,000 万円（税別）でネーミングライツを取得した通称ビッグアイのサブ競技場として建設費約４億３千万円をかけて整備された（因みに公園全体の建設費は約 580 億円、ドームは約 250 億円）。５年位に１度公認の検定を受けている。

公園全体の指定管理料として県は年間約３億８千万円を㈱大宣に支払っている。

年間の利用者目標を 120 万人と定め、概ね 98%以上の達成率を毎年重ねている。

〔感想・岡崎市への反映〕

だいぎんグラウンドはあくまで大分銀行ドームのサブ競技場の扱いである為、更衣室も一応設置されているが実際は使用禁止、放送施設も簡易的なものであった。大分市には第１種陸上競技場である大分銀行ドームの他にも市営の１種Ｂにあたる陸上競技場があり、大分市で開催される陸上競技大会の２/３はそちらで開かれ、１/３が大分銀行ドームで行われているそうである。

もちろんトラックや芝はキチンと整備されているが、隣にあるドームがメインである印象は拭えない。実際ドーム内のトラックも含め一般市民は 100 円でいつでも使用でき（高校生以下は 50 円）、雨の日などはドーム内の通路も練習用に使用を許可しており、ドーム内は常に多くの陸上競技を行う市民で溢れているとのことであった。

今回の視察で、本市にはこのようなサブグラウンド的な競技場さえ無いと言う現実を改めて痛感させられた。早期の第３種陸上競技場の建設はもちろん、38 万都市である本市のメイン競技場に相応しい施設の整備への尽力を更に推し進めたい。

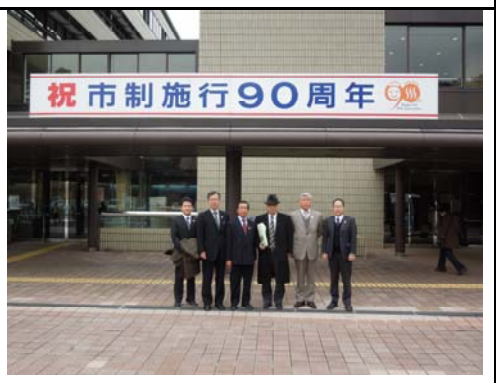
会派会長：山崎泰信　㊞

調査研究（研修）視察報告書

報告者：内田　実

視　察　日	平成27年1月14日（水）
視察内容	市制９０周年記念事業について
視　察　者	小野政明　野村康治　内田　実　川上　守　鈴木静男　三浦康宏

【　概　要　】



別府市制施行90周年という節目の年を、市民とともに祝うために様々な記念事業を展開し、これを機会に、自然や歴史、生活の中ではぐくんできた文化など別府の魅力を再認識し、地域の活性化につなげるとともに、過去から現在、そして未来に向けて夢と希望に満ちたまちを継承していくことを目的としている。

基本方針の視点は以下の4点である。

（１）　温泉の恵みに感謝し、別府のまちを再認識する。
（２）　別府の魅力を体感し、国内外に情報発信する。
（３）　別府の良さを発見し、将来を担う子どもたちへ継承する。
（４）　みんなが交流参加し、地域の活性化を推進する。

事業期間は、市制施行記念日の平成26年4月1日から平成27年3月31日までとし、主な記念事業は、以下のとおりである。

◇　記念式典

別府市制施行90周年記念事業の基本方針の趣旨を踏まえ、100回を迎える代表的な伝統行事である「別府八湯温泉まつり」とともに歴史的節目を祝うため、別府まつり振興会と市との共催により実施された。内容は、「市制90周年特別表彰」、「未来へ向けたメッセージ」、「記念パネルディスカッション」が特徴的なものである。

◇　記念イベント　　春のＯＮＳＥＮ花火大会　～湧いてます。べっぷ。～

例年夏に行われていた花火大会を別府八湯温泉まつりの開催期間中に記念式典の日に合わせ、実施した。打ち上げ規模は、別府夏の良い祭り納涼花火大会と同じ程度の規模であったが、初登場の新作花火も披露した。会場内では、屋台やイベントなどを午後5時から開催された。

◇　冠イベント

従来から市が主催または共催する事業で、記念事業として位置づけられるものについて、「別府市制 90 周年記念事業」の冠名称を付して行うことにより、広く市民に周知するとともに記念の年であることの機運を高め、多くの市民の参加を呼びかけていった。対象事業数は、２６事業を数え、トータルの開催規模は、５０万人を超え、人口の４倍以上の規模となっている。

◇　民間冠イベント

別府市制施行 90 周年を市民と共に祝い、記念すべき節目を盛り上げるため、民間で実施されるイベント等を対象に「別府市制 90 周年記念」の冠を付して実施する事業を募集した。民間イベント開催に当たり、希望者にはのぼり旗を無料で貸し出し、ウェブサイト、公式フェイスブック、ホームページなどで PR の支援をした。

【感想・岡崎市への反映　】

別府市の記念事業キャッチフレーズを「湧いてます。べっぷ」とし、市民・市・企業・団体等全ての関係者が主体となり、力を合わせて活躍する契機とするために展開されている。記念事業関係予算は25年度は2595千円、26年度は21241千円であり、無駄なお金をかけずに最少の経費ではあるが、多くの人に参加をしてもらうというコンセプトが生かされている。

そういった観点からも、来たる100周年に向けて、未来への視点を持っている、10年後に成人式を迎える全児童を対象に、タイムカプセルを制作してもらい、市制100周年時に成人式でお祝いを兼ねて皆で開封するという企画は、経費がかからず大きな夢を詰め込んだ素晴らしいものである。

岡崎市の100周年事業に向けては、別府市が実施したように、創造と工夫をこらし、市民の心をとらえ、多くの市民の参加でいつまでも心に残る年とすると共に、100周年以後の新しい時代における飛躍のきっかけとなる記念の年にしたいものである。

自民清風会長　　山崎泰信　㊞

調査研究（研修）視察　報告書

報告者：川上　守

視　察　日	平成27年1月15日（木）　9時45分～11時30分
視察内容	中津市：観光振興について
視　察　者	小野政明、野村康治、内田実、鈴木静男、三浦康宏、川上守

＜中津市の概要＞

県の西北端に位置し、北西は福岡県に接し、北東は周防灘に面する。
市域の約78%を山林原野が占め、山国川下流の平野部にまとまった農地が開け、中津地域を中核とする。北部は狭く南部は西方に大きく張り出した形状を示し、西側に英彦山がそびえ、地域を貫流する山国川の分水嶺となっている。
山国川とその支流域に、自然環境に恵まれた山村・田園集落と歴史情緒豊かな城下町を持つ、心安らぐ潤いのあるまち、初代中津城主である黒田官兵衛孝高を主人公とする14年大河ドラマ「軍師官兵衛」が放映されて、各種官兵衛関連イベント等の開催を通じて市の魅力を全国に情報発信
「カキ試験養殖」は14年度より本格的にカキ養殖事業として取り組み、市の新しい水産業としての定着、

将来都市像　山国川の「みず」と耶馬の「もり」のめぐみを受け、
「ひと」が育ち・癒され・たゆみなく「もの」がうまれる、「人にやさしい」まち”なかつ”のまちづくりを目指す。

面積：491.17㎢　　人口：84,922人

＜観光の現状＞

市町村合併を受けて、自然溢れる景勝地「耶馬溪」が加わることにより、観光地にとっての基本要件である「歴史」「文化」・「自然」の三拍子が揃うことになり、これらの魅力の相互補完と連携により、将来、九州および大分における有数の観光地となる必要条件が整ったと言えます。
しかしながら、新中津市における観光客の特徴として、滞在期間の短さや観光資源に恵まれてはいるものの、それらを結びつける周遊ルートの開発の遅れや中津・耶馬溪に対するイメージやPR不足などにより、観光客の滞在時間が短く近隣の有名観光地への流出を許しています。
観光地の評価は「滞在時間に比例して高まる」と言われていますが、たとえ宿泊に伴う消費が少なくても、滞在時間が延長されれば、食事、観光経費、交通費、ショッピングに伴う経費が増大し、大きな消費が期待できます。

SWOT分析

	プラス	マイナス
内部環境	強み (Strength)	弱み (weakness)
外部環境	機会 (opportunity)	脅威 (threat)

＜観光振興における課題＞

現状をSWOT分析した結果、本市には「耶馬溪」「からあげ」他にも、多くの知らない強みを持ち、これらを有効に活用した「観光コンテンツづくり」「受入体制づくり」が遅れている。
中・長期的な視点に立った本市の観光戦略の計画立案が必要と考えられます。

今後、地域の魅力を発掘し、磨き「訪れたい」「滞在したい」「交流したい」と思わせる土地を育てることが、魅力豊かな「観光地」となりえます。スローツアー型観光客の増加やグリーンツーリズムによる長期滞在型観光の需要が増しており、中津市の観光浮揚を左右する、新たな観光の分野として、スポーツ施設の充実によるスポーツ観光や企業の工場見学に代表される産業観光など、市域には多くの観光資源が存在しています。これらをお互いに連携し魅力ある観光地「中津」をつくりあげることが大きな課題である。

＜観光コンテンツ開発と取り組み事業＞
※　事業主体＝地域・行政・外部を明確に定める

食・グルメ　⇒　からあげ・はも料理・黒田ゆかりのお菓子
歴史・人物　⇒　黒田官兵衛・中津城・福沢諭吉
スポーツ　⇒　施設活用の展開
景観・イベント　⇒　耶馬渓・八面山・コスモス園・かかしワールド

中津市の強みや機会を活かした4つの取組事業で
新たな「観光コンテンツづくり」を推進！

意外にすごい！中津市
中津市の知られていない「すごい！」を観光戦略の
訴求コンセプト（テーマ）として情報発信

＜弱みや脅威の克服＞

観光地の整備　⇒　青の洞門の落石対策・公衆トイレ整備
温泉地のPR　⇒　温泉マップの作成、配布
観光案内サイン整備　⇒　計画的整備
観光意識の醸成　⇒　ガイドの育成、活用・マイスター制度の導入
外国人旅行者の対応　⇒　観光客の誘致・パンフレット作成・多言語標記案内板
広域連携の取り組み　⇒　大分県北部地域観光圏協議会の強化
九州周防灘地域定住自立圏広域観光振興協議会の強化
新たな地域との連携取組強化

ターゲット　温泉ファン・外国人など

プロモージョン手法　HPなどによる周知徹底や市民の参画

ねらい　受入体制づくりとおもてなしの心の醸成

＜感想・岡崎市への反映＞

平成19年3月、市長の諮問に応じて、観光審議会から答申された「新・中津市の観光振興に関わる報告書」で指摘された観光振興10の課題を検討・解消し、市民や観光関係者、行政が協働で観光振興施策を推進するため、平成25年度を初年度とし、3年間の計画とし、観光を取り巻く現状要因をSWOT分析により整理、外部環境として「機会」と「脅威」を整理、本市観光の「強み」と「弱み」を明らかにして観光戦略の展開イメージと目指すべき姿「中津市観光ブランド」の創出と定着を掲げPDCAによる観光コンテンツ開発に取り組、事業として「食・グルメ」「歴史・人物」「スポーツ」「景観イベント」事業ごとにターゲット・プロモーション・ねらい・を定めてスケジュールを明確にし年度別にPDCAをまわした改善を進め3年間で成果を上げた。
本市も家康公顕彰四百年記念事業、市制100周年を迎えるため、PR活動の充実と観光産業都市を目指すための基盤整備の充実を図るには、市民に分かり易く目に見える取り組と、取り組ポイントを明確化してPDCA実施のスピード化が必要である。